

国際教育センターにおける日本語支援室の活動

吉野 文¹

要約

本稿は、国際教育センターに2004年度後期に開設された日本語支援室についてその概要を報告し、2006年度を中心に活動内容と課題を考察するものである。利用者数の推移、チューターの活動、広報などの概要を紹介するとともに、留学生にどのように利用されているか、また、支援室チューターの働きかけによって支援室がどのような学習の場になっているかを考察した。最後にこの活動を続けていく上での課題を二つ指摘した。

1. はじめに

本学国際教育センターには、留学生支援の一環として日本語支援室が設置されている。全学の留学生が自由に利用できる学習室で、インターネット接続のパソコン、日本語学習教材・機器が利用できるほか、大学院生などによるチュータリングを受けることができる。

本稿では、日本語支援室（以下、支援室）の概要を報告し、2006年度を中心に活動内容と課題を考察する。

2. 活動の概要

2. 1 利用者数の推移

支援室は、2004年度後期に国際教育センター（当時は国際教育開発センター、以下、センター）の2階にあったCAI室を有効活用する形で開設された。

開室日と利用者数の推移は表1のとおりである²。当初は管理の面から週3日開室していたが、利用者からの要望もあり、開設2年目の2005年度後期からは週5日開室するようになった。2006年度になって、半期ごとの利用者数がやや減少しているが、これは留学生寮である国際交流会館でインターネット接続工事が行われ、インターネット利用のためだけに利用する留学生が少なくなったことによるものと考えられる。

表1 日本語支援室利用者数の推移

	開室日	利用者数 (のべ)
2004年度後期	月・水・金 3日間	108名 (44日間)
2005年度前期	月・水・金 3日間	234名 (42日間)
2005年度後期	月・火・水・木・金 5日間	1004名 (79日間)
2006年度前期	月・火・水・木・金 5日間	849名 (70日間*)
2006年度後期	月・火・水・木・金 5日間	896名 (80日間)

*実際には1日分記録が欠けているため、利用者数は69日分の数字である。

2. 2 チューターの活動

支援室では、日本語教育・国語教育の知識や経験を有する学生が在室し、センターの日本語担当教員と協力してチューター活動を行う体制を取っている。その中心となっているのは、日本語教育学・言語教育学・国語学などを専攻する、留学生を含む大学院生である。学期によっては日本語教育学・日本語学専攻の学部3・4年生も加わっている。

学期の始めにチューターの在室する時間を決め、スケジュール表を作成して掲示している³。チューターが不足気味の現状では、開室中すべての時間にチューターが在室しているわけではない。

表2 チューター数・在室時間の推移

	チューター数	チューターが在室した時間/週
2004年度後期	7名 [2] (3) *	14時間
2005年度前期	9名 [1] (5)	13時間40分
2005年度後期	10名 [0] (5)	19時間30分
2006年度前期	7名 [2] (1)	19時間30分
2006年度後期	7名 [2] (1)	19時間30分

* [] 内はチューターのうち、自身も留学生である者の数。() 内は、同じく学部生の数。

チューターに期待されている基本的な役割は、①日本語に関する留学生の質問に専門知識や媒介語を使って対応し、確認・練習・実際使用の機会を提供すること、②日本語による書類作成の手助けや生活情報の提供などを通じて、留学生の問題解決をサポートすることである。来室した留学生とチューターの具体的な関わりについては後述する。

個々のチューターが在室中に行った活動は、ミーリング・リストでチューター全員と担当教員に報告し、活動全体の状況の把握、個々の対応が速やかにできるようにしている。担当教員も、センターの日本語授業のシラバスをチューターが参照しやすい形で提供したり、支援室を利用する留学生に対する日本語指導上の留意点をミーリング・リストで流したりするほか、年に数回ミーティングを行って、支援室の円滑な運営に努めている。

2. 3 広報

支援室は、まずその存在を留学生に知ってもらわなければならない。日本語・英語・中国語・ハングルによるポスターの掲示、新入生ガイダンスや日本語授業でのチラシの配布などによって、できるだけ多くの留学生の目に留まるようにしている。

2006年度後期にはセンターのホームページがリニューアルされたのに伴い、日本語支援室に関する情報も詳細を掲載するようになった⁴。

支援室の使い方、チューターの紹介と在室時間の情報のほか、留学生のためのFAQを作

成した。これは、チューターの日ごろの経験から思いつく質問とその答えを提出してもらって編集したもので、日本語学習、図書館、パソコン・コピー、交通、郵便、引っ越し、病気、アルバイト、交友の各項目からなる。

3. 活動の実際—2006年度のチューター活動を中心に

3. 1 利用状況

表1からもわかるように、2006年度の利用者数をチューターの報告書から集計し、前期・後期を合計すると、のべ1745人になる。この期間にチューターが在室したのは計320コマなので、1コマ(90分)あたりの平均利用者数は5.5人ということになる。

また、利用目的は、以下のように分類することができる。

「PC利用⁵⁾」 支援室に設置されたパソコンを使用して情報収集、文書作成、印刷を行う。

「会話」 チューターと日本語で会話をする。または、留学生同士の会話にチューターが日本語で参加する。

「日本語」 日本語そのものに関する質問、日本語の文章の添削、留学生が受け取った日本語文の解説をチューターに求める。

「自習」 パソコンを使用せずに、授業や研究の準備や課題などを行う。

「生活支援・情報提供」 勉学上、生活上の情報や支援をチューターに求める。

「専門⁶⁾」 チューターに対し専門分野の研究に関してアドバイスを求める。

「その他」 留学生同士の交流、情報交換など。

2006年度の利用目的別件数は表3のようになる。合計が2110件と、のべ利用者数1745人を上回っていることからわかるように、来室者の2割ほどは、複数の利用目的で来室している。報告書からは、パソコンを利用しながら日本語の会話に参加する、自習をしながらパソコンが空くのを待つ、自習をしながら日本語の質問をチューターにする、というような利用のしかたが多いことがわかる。

表3 利用目的別件数

PC利用	会話	日本語	自習	生活支援 情報提供	専門	その他	計
1157 (55%)	262 (12%)	217 (10%)	214 (10%)	99 (5%)	48 (2%)	113 (5%)	2110

3. 2 支援室におけるチューター活動の特徴

本学には、一人のチューターが1対1の関係で1~2年間にわたって同じ留学生を担当

するチューター制度がある⁷。支援室におけるチューター活動の特徴と意義を考えるためには、こうした個人チューターとの違いを明らかにしておく必要があるだろう。

表 4

	個人チューター	支援室チューター
留学生との関係	1対1	不特定多数
チューター期間	入学時から一定の期間(1~2年)	期間・頻度は不定
活動の場所・時間	任意	定められた場所・時間
専門性	基本的に留学生と同じ学部・研究科であることが多い	言語教育・言語学習のスキルを持った、特定の専門分野の学生である

留学生の側から見ると、支援室に行けば約束をしておかなくてもチューターに対応してもらえる、また、チューターとの関わりを継続するかどうか、どのチューターに何を求めるかは自分で決めることができるというメリットがある。また、チューターと関わらなくても、自習やインターネット利用の場として支援室を活用することも可能である。

一方、チューターの方から見ると、特定の留学生が相手ではないため、日本語能力、専門、学生としての身分も様々な留学生のニーズに臨機応変に対応しなければならない。「日本語支援室」とは言うものの、実際には授業料免除申請や資格外活動の申請など、生活支援に関する質問が持ち込まれたり、コンピューターの使い方について質問をされたりすることも多いようである。さらに、留学生に積極的に話しかけて、留学生のほうから話がしやすい関係を築いておくことも必要になる。3. 3でも触れるように、そのことが留学生側の潜在的なニーズを発見することにもつながるからである。

3. 3 支援室におけるチューター活動の実際

ここでは、在室中の記録をもとに、支援室でどのような支援、交流がなされているかを具体的にみていく。

3. 3. 1 関係づくり

【事例1】

- チューターは留学生Aの研究テーマについて話をする。
- Aはパソコンを利用して文献の検索を始める。
 - 検索した文献の入手方法をチューターに聞く。
 - チューターはその専門分野の教員が所属する学部のホームページを検索して文献の所在しそうな研究室を探す。
 - チューター時間終了後、Aとともに学部事務室へ行く。

→ 研究室を一緒に訪問して論文をコピーさせてもらう。

この事例では、Aが来室した際にチューターが留学生と話をしたことによって、Aとチューターの間で情報が共有され、チューターにとってはAの課題を理解しやすい状況、Aにとっては課題を進めていく中で出会った困難を相談しやすい状況が作り出されている。Aは論文と一緒に探しに行くことを最初からチューターに求めていたわけではないだろう。チューターからの声かけがあったこと、支援室が自習の場になっていることから、Aは学習を進める中で「聞きたいこと」がチューターに聞けたのだと考えられる。

3. 3. 2 留学生の役割

これまで支援室のチューターを務めてきた留学生は、日本語教育を志向する学生が多いこともあって、高度の日本語能力を持ち、日本語そのものについての知識や日本経験も豊富であった。

日本語能力が初級から中級で母語・母国語が同じ留学生からは、指導教員から受け取ったメールの翻訳を頼まれたり、母語を使って意味を丹念に確認しながら論文の添削をしたりするケースが見られる。

また、チューターの流暢な日本語に対し、留学生なのにどうして日本語が上手なのか尋ねられるなど、日本語学習のモデルとしての役割を果たしたり、日本の生活に対する不満の聞き役となったりするケースも見られる。留学生チューターの能力と経験は、支援室の活動に不可欠な貴重なリソースとなっている。

ただし、興味深いことに、こうしたピアによる相互支援はチューター以外の留学生の間でも見られる。

【事例2】

日本語能力初級の留学生Bが個人チューターと待ち合わせしていた。

- Bはチューターが現れないので、パソコンでチューターにメールする。
- 母語が同じ隣の席の留学生Cが、Bがチューターに電話をかけたがっていることを支援室の日本人チューターに伝える。
- 支援室のチューターがCの個人チューターに直接電話をして待ち合わせの場所を確認する。

また、支援室では、事例3のように日本語のレベルや所属の異なる留学生同士が言語を教え合うことが時々見られ、学生同士のインターアクションを活性化し、ともに学びあう場となるときっかけとなっているようである。

【事例3】

日本語能力上級の学部留学生Dが長時間パソコンを利用していた。

→ ヨーロッパ出身の短期留学生Eが来室し、同じくパソコンを利用する。

→ Eが、Dの英語のレポートの添削を手伝い始める。

3. 4 チューターにとっての活動の意義

上述のように、日本語支援室のチューターは臨機応変に対応するだけでなく、潜在的なニーズに対応できるように来室者との関係作りに心を砕いている。現状では、1コマを一人で担当することが多いため、利用者が多い場合には対応が難しい場合もある。

しかしながら、チューターにとってこうした接触場面を経験し、多様な価値観に触れる意義は大きいものと思われる。筆者が2007年1月に実施したチューターへのインタビューからは、留学生の宗教的背景に対する理解の深まり、外国人に対する日本人のステレオタイプへの気づき、留学生の書いた日本語の背景にある社会文化的な前提への気づきなど、活動を通じた発見が報告された。チューター経験が彼らの今後の活動に生かされることを大いに期待したい。

4. 今後の課題

これまでの活動を通して、現状にはいくつかの課題があると感じている。ここでは以下の二点を指摘しておきたい。

一つは、利用する学生が固定的になる傾向があることである。繰り返し利用する者の中には、センターで集中的に日本語授業を受講する日本語研修コースの学生を始め、センターで授業を受けている学生が多い。これは、千葉大学に入学して間もない学生、あるいは日本語学習が必要な学生が利用しやすいことを示しており、望ましいことではある。しかし、実際には日本語支援室の存在やそのサービスの内容を知らない、あるいは、時間的・地理的な条件から利用できない学生もいる可能性がある。また、何らかの事情で個人チューターが付かず困難な状況にあるケース、あるいは、相当の在学期間があり個人のチューターのいない留学生が日本語支援を求める場合には、支援室のチューターが役立つと思われる。後者の利用は少しずつ見られるようになってきているが、周知活動を継続して行うことは必須であろう。

二つ目は、チューターを支援するシステムのあり方を考えることである。支援室には自習教材が置かれているものの、レベルやニーズに合った教材をチューターから留学生に提案できるような態勢はまだ整備されていない。支援室チューターだけでなく、全学にいる個人チューターも利用できるようなシステムが望ましいと考える。

外国で非母語話者として生活をしていると、他者に説明されたことと具体的に行動できることには乖離が生じる。どうしたらよいか留学生が迷ったとき、授業では聞けない質問が出てきたとき、気軽に利用できる場所として日本語支援室が活用されることを願って、

活動を続けていきたい。

参考文献

千葉大学国際教育センター編 2006『留学生支援入門』

¹ 日本語支援室は国際教育センターの事業として行っており、複数の教員が担当者として関わっているが、本稿の文責はすべて担当者の一人である吉野にある。

² 表1はチューターが在室した時間内に確認できた利用者数である。実際の利用者はこれより多い。

³ 毎年留学生施策充実経費を申請し、チューターには在室時間数に応じた謝金が払われるようになっている。2006年度以降は学部生の場合も同様である。

⁴ <http://www.international.chiba-u.ac.jp/support02.html>参照のこと。また、支援室のルールについては、本稿末尾の資料を参照されたい。

⁵ パソコンは利用者がソフトをインストールすることができないように設定されている。

⁶ チューターと同じ専門分野の留学生、または、短期留学生のうち「特別研究」として日本研究のレポート作成を行っている留学生からの支援要請がほとんどである。専門書の漢字の読み、文法・表現レベルの添削など、日本語指導の範囲内のもは対応可能であるが、専門の内容に立ち入った指導はできないことを利用者に理解してもらう必要がある。

⁷ 詳しくは『留学生支援入門』参照。

資料

にほんごしえんしつ 日本語支援室へようこそ

日本語支援室には、日本語の教材やパソコンがあります。日本語を勉強するのに使ってください。また、留学生のみなさんの日本語の勉強をお手伝いするチューターがいます。全員千葉大学の学生です。わからないこと、困っていることがあったら、気軽にチューターに相談してください。

1. 場所

国際教育センター2階 CAI室1

2. 開室時間

月曜日～金曜日の午前10時30分から午後5時までです。

授業がない日、期間は使えません。主に2限、3限、4限の時間にチューターがいます。チューターがいる時間は、入り口に掲示します。

3. 使い方

(1) 本、辞書、雑誌などは、本棚にあります。借りられるのは、雑誌だけです。本や辞書はこの部屋から持ち出さないでください。雑誌を借りる場合は、貸し出し用ノートに記入してください。貸し出し期間は2週間です。

(2) 教科書のCDやCDプレーヤーを利用するときは、チューターから借りてください。

(3) プリンターで印刷できる枚数は1回につき1人15枚までです。紙がなくなった場合は、チューターからもらってください。

(4) 支援室のパソコンで作成したファイルは、ハードディスクに残さないようにしてください。残っている場合は管理者が削除しますので、十分注意してください。

(5) 支援室のパソコンは、ソフトウェアのインストールができない設定になっています。

4. その他

日本語支援室では飲食、携帯電話の使用はできません。音を出して音楽などを聞くのも遠慮してください。

※日本語支援室に関する質問は、国際教育センターの以下の教員までお願いします。

マーチン・ホウダ (2階 研究室5)、佐藤尚子 (2階 研究室2)、吉野文 (3階 研究室9)